

知的障害特別支援学校における交流及び共同学習の  
実践に関する調査研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 達也 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00008474">https://doi.org/10.14945/00008474</a>

# 知的障害特別支援学校における交流及び共同学習の

## 実践に関する調査研究

鈴木 達也

A Study of Exchange Activities and Collaborative Learning in Special Needs Education  
Schools for Children with Intellectual Disabilities

Tatsuya SUZUKI

### 1 問題の所在

我が国では、障害の有無にかかわらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し合える共生社会の実現を目指している。そのためには、障害のある人と障害のない人がお互いに理解し合うことが不可欠であり、障害のある児童生徒と障害のない児童生徒とがふれ合い、あるいは、地域社会の人たちがふれ合い、共に活動できる機会を設けることが大切であるといわれる。

2008年に国立特別支援教育総合研究所が発表した「交流及び共同学習」の推進に関する実際的な研究によると、障害のある児童生徒に対しては、その障害の状態等に応じて、特別な配慮のもとにきめ細かい教育を行う必要があることはいまでもないことである。また、障害のある児童生徒と障害のない児童生徒とが活動を共にする機会を設けることは、障害のある児童生徒の経験を広め社会性を養い、好ましい人間関係を育てるために有意義な点であることも見逃すことができないことである。交流及び共同学習は、障害のない児童生徒にとっても、障害のある児童生徒と多くの共通点を見いだして仲間意識を育んだり、障害のある児童生徒自身の障害を克服する意欲に触れて、自分の生活の姿勢や学習態度を顧みたりするよい機会となる。また交流及び共同学習で接する障害児への思いだけでなく、幼い子どもやお年寄り等を含めて、自分たちの地域社会を構成しているすべての人々に対して、豊かな思いやりのある気持ちを育てる活動の場に繋がるものであるとも述べている。さらに、文部科学省の交流及び共同学習ガイドによると、障害のある児童生徒が小・中・高等学校等の児童生徒と共に活動することは、双方の児童生徒の社会性や豊かな人間性を育成する上で、重要な役割を果たしており、地域や学校、児童生徒の実態に応じて、様々な工夫の下に進められてきている現状が分かる。また、小・中学校等や特別支援学校の学習指導要領等においても、障害のある児童生徒と障害のない児童生徒が活動を共にする機会を積極的に設けるよう示されている。

私は、大学院に入学してからの授業やM1前期の小学校特別支援学級での実習を通して、インクルーシブ教育という言葉を知った。インクルーシブ教育とは、そもそも障害の有無に関係なく障害のある人たちが障害のない人たちと同じ場で共に学ぶ考え方のことで、一人一人誰もが違うことを前提とし、個別の教育的ニーズに応じた支援を行うことが必要であるとされる。インクルーシブ教育へ向かっていくためには、児童生徒の状態を考慮した上で、可能な限り一緒の場で学ぶことを充実する必要がある。そのため今後、交流及び共同学習のニーズは高まっていくといえる。

大学院での実習を通して、知的障害特別支援学校における交流及び共同学習では特別支援学校の児童生徒への支援だけではなく、交流する通常の学校の児童生徒への配慮も大切であることを知った。さらに特別支援学校の児童生徒が将来地域で自立して生きていくためには、社会性を身

に付けるだけでなく交流先の学校の児童生徒や同じ地域に住む人たちに障害のある児童生徒を知ってもらうことも大切だということを、実習校の先生方から学ぶことができた。

私は特別支援学校の教員を目指している。特別支援学校の教員になったとき目指す一番のものは、児童生徒が地域で幸せに生きることだと考えている。児童生徒が将来幸せに生きることを考えてみると、職場であったり、隣人・友人であったり、人と友好的にかかわることがやはり大切である。そこで、地域で生きていく上で地域の同世代の人たちのかかわりや、他の人とどのようにかかわればよいかを学ぶ時間が大切なのではないかと考えるようになった。特別支援学校の教育で、地域とのかかわりや同世代の人に知ってもらうためには、やはり交流及び共同学習の時間を有意義にすることが大事なのではないかと感じる。そのため本研究では、交流及び共同学習を実践していくにはどのようなことが重要であるかという点や、今後のインクルーシブ教育の進展との結びつきについても併せて研究していきたい。

## 2 目的

- ① 知的障害特別支援学校からの視点に加え、通常の小学校の児童の反応を踏まえた交流及び共同学習について考察すること。
- ② 実習校の先生方が交流及び共同学習を実践していくうえで大切にしている事項についての調査や、インクルーシブ教育との関連を踏まえながら、自分自身の学びを深めること。

## 3 方法

A市内の知的障害特別支援学校であるB特別支援学校の小学部4年生の学校間交流と居住地校交流を対象に調査を進めた。交流に同行し指導、児童同士のかかわりを観察するとともに、小学部副主事及び小学部4年生の担当教員にインタビュー調査を実施した。

小学部4年生担当教員へのインタビュー調査に関しては、「交流時の児童の様子で気付いたこと・よかった点」、「交流をふり返ってみて課題や問題点」、「交流の指導で工夫・配慮した点」等についてインタビューを行い、エピソードを整理した。

小学部副主事へのインタビュー調査に関しては、「交流及び共同学習を進めるうえでのねらい」、「教育課程上の位置づけ」、「事前学習の指導、準備」、「交流及び共同学習を実施するにあたって大切にしていること、指導の工夫」、「日常生活に繋げていくために、事後指導での工夫」、「保護者の方との連携」、「交流相手校との連携で大切にしていること」、「実施した交流及び共同学習の成果」、「現在の課題と、交流及び共同学習について感じていること」についてエピソードの整理を行った。なおインタビュー項目は、久保山ら（2006）が行った「交流及び共同学習」に関する調査研究で使用された調査用紙を参考に作成した。

対象とした交流及び共同学習の日程については下記の通りである。

学校間交流：2014年10月16日、10月30日

居住地校交流：2014年9月25日、10月23日、10月28日

10月16日に実施された学校間交流は交流した小学校で実施され、10月30日の学校間交流はB特別支援学校にて実施された。また、小学部4年生で実施された居住地校交流は3名の児童が参加し、それぞれの居住地の学区の小学校を訪問して交流を実施した。

次に、B特別支援学校と交流している小学校4年生の児童への意識調査を10月30日の学校間

交流後実施した。調査項目は、高野・片岡（2014）が実施した意識調査の項目を参考に調査項目を作成した。児童の回答を「以前と比べて、特別支援学校の友だちのできることに気付いた」、「特別支援学校の友だちのよかったところが分かった」、「楽しかった、特別支援学校の友だちと仲良くなれた」、「友だちの好きなことが分かった」という 4 つの内容に分け KJ 法を使って分類、整理した。

#### 4 結果と考察

##### （1）学校間交流を行った小学校児童の交流及び共同学習への意識について

本研究の調査結果から回答を求めた小学校の児童全員が特別支援学校との交流及び共同学習に対してポジティブなイメージを抱いていることが明らかとなった。

はじめに、「特別支援学校の友だちと仲良くすることができましたか」という質問に対し調査を行った小学校の児童全員が「はい」と回答していた。このため、交流した小学校の児童が B 特別支援学校の児童に対して親しみを抱いていることが分かった。また自由記述の結果から「以前と比べて、特別支援学校の友だちのできるようになったこと、頑張っていることに気付いた」、「特別支援学校の友だちのよかったところが分かった」、「楽しかった、特別支援学校の友だちと仲良くなれた」、「友だちの好きなことが分かった」という前向きな回答を児童全員から得られた。このことから、B 特別支援学校と交流した小学校の児童が、特別支援学校の児童の頑張りやよさに気付いていることが明らかとなった（図 1）。

はじめに、「特別支援学校の友だちと仲良くすることができましたか」という質問に対し調査を行った小学校の児童全員が「はい」と回答していた。このため、交流した小学校の児童が B 特別支援学校の児童に対して親しみを抱いていることが分かった。また自由記述の結果から「以前と比べて、特別支援学校の友だちのできるようになったこと、頑張っていることに気付いた」、「特別支援学校の友だちのよかったところが分かった」、「楽しかった、特別支援学校の友だちと仲良くなれた」、「友だちの好きなことが分かった」という前向きな回答を児童全員から得られた。このことから、B 特別支援学校と交流した小学校の児童が、特別支援学校の児童の頑張りやよさに気付いていることが明らかとなった（図 1）。

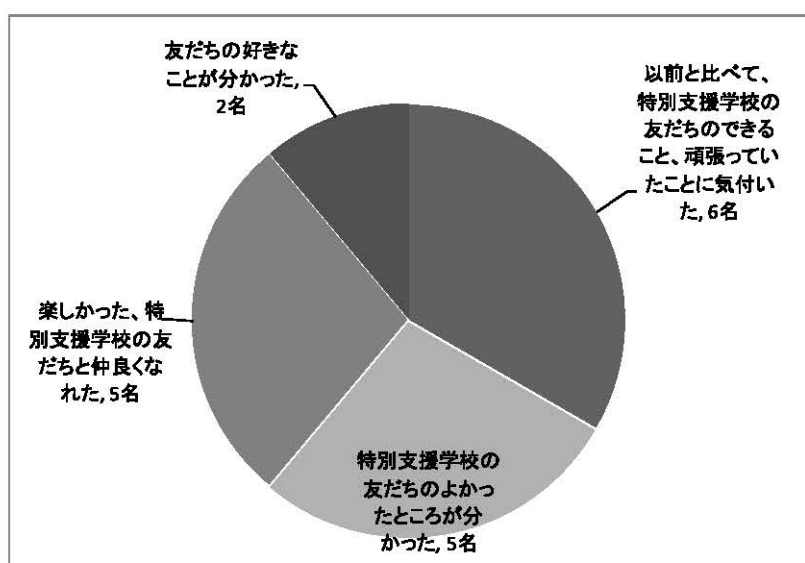


図 1 4 年生になってからの友だちとの交流会で新しく気づいたこと

B 特別支援学校の教員へのインタビュー調査によると、実施した交流及び共同学習の成果として、1 年生から交流会を実施しているため 4 年間の積み重ねがあること、児童同士の仲の良いことが挙げられた。加えて 10 月 30 日に実施された交流会の観察では、導入の話し合いの時間で B 特別支援学校の児童と交流相手校の児童が自然に輪となって話ができていること、前回の交流会で友だちになった交流相手校の児童と話をしているところ、友だちと仲良く一緒にゲームをしている姿が認められた。B 特別支援学校小学部 4 年生の教員からは、緊張していたり会話が難しかったりする児童のグループでは、絵を一緒に描くことを通して、児童同士が話し合いに参加できるような支援をしたとの回答を得た。このため、児童同士の自然なふれ合いの時間が生まれたことにより、小学校の児童が「特別支援学校の友だちと仲良くなれた」と実感し、特別支援学校の児童のよさや頑張りを見つけて見つけることができたのではないかと考えられる。

次に、「今度も交流会をやってみたいですか」という質問にも小学校の児童は全員「はい」と回

答していた。このことから小学校の児童が B 特別支援学校の児童との交流及び共同学習について前向きな思いをもっていることが伺える。10月16日、30日に実施された交流及び共同学習の観察では、活動中双方の児童が楽しくゲームをしたり、話をしたりする姿が認められた。特に16日の交流会の後、校門付近まで見送りに来てくれる小学校の児童の姿がみられ、次回の B 特別支援学校との交流に期待感をもっている様子を見ることができた。30日の交流会では、小学校の児童が B 特別支援学校の児童との活動内容を考えていたそうである。そこで交流相手校の児童が、自分たちで考えてきた活動と一緒に楽しむことができたという達成感をもつことができたことで、交流及び共同学習に対する意識がポジティブなものへ変容したことが推察される。

## (2) 共に理解するための交流及び共同学習の指導について

B 特別支援学校小学部副主事へのインタビュー調査によると、B 特別支援学校の教員は児童が交流中に不安定になったときこそ、“障害を理解してもらおうチャンス”であると捉えていることが明らかとなった。実際、30日の交流及び共同学習の観察において、B 特別支援学校の児童の1人が落ち着かなくなってしまった際、担任教員が落ち着かなくなった児童への対応を、もう1人の教員が周囲にいた小学校の児童に、「〇〇さん、みんなと交流することが久しぶりだから少し不安になったみたいだけど、落ち着いたら大丈夫だよ。」と児童の特性やかかわり方の説明を行う姿を観察できた。2012年に中央教育審議会初等中等教育分科会から公表された「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」によると、合理的配慮の観点のひとつとして幼児児童生徒、教職員、保護者、地域の理解啓発を図るための配慮を挙げている。その中で「障害のある児童に関して、障害によって日常生活や学習場面において様々な困難が生じることについて周囲の児童に理解啓発を図る。共生の理念を涵養するため、障害のある児童の集団参加の方法について、障害のない児童が考え実践する機会や障害のある児童自身が障害について周囲の人に理解を広げる方法等を考え実践する機会を設定する。」と述べている。このため交流相手校の児童に特別支援学校の児童のことを知ってもらうための手段の1つとして、特別支援学校の教員による通常小学校の児童への支援が大事であると考察される。

次に小学部副主事へのインタビュー調査から、これまでの交流及び共同学習の積み重ねと、児童が「楽しかった」「仲良くなれた」「友だちになった」「上手に発表できた」等の実感をもつことができ、学区の同年齢の知り合いを広げることができたという成果が挙げられた。小学部4年生の教員へのインタビュー調査においても、児童同士の積極的なかかわり合いがみられたこと、これまでの交流の経験が生きていたとの回答を得た。このため、交流相手校の児童の4年間の交流体験の積み重ねと児童同士の仲の深まりが、児童同士の自然なかかわり合いや小学校の児童が交流に対して前向きな姿勢をもったことに少しずつ影響したことが推察される。久保山ら（2006）の研究によると、「1年間のみでは成果はみられないが、毎年行っていることで成果がみえてくるように思う」、「継続して行うことで、お互いの意識が深まるように思う」との現場からの回答を報告している。したがって児童の自然なかかわり合いを深めていくために、交流及び共同学習を早い段階から実施し、継続的に実施していくことが大切であると考えられる。

## 5 今後の課題

本研究を通して、知的障害特別支援学校と通常小学校の間で行われる学校間交流と居住地校交流それぞれの課題が明らかとなった。

## (1) 学校間交流に関する課題

1つ目に課題として挙げられたことは、B 特別支援学校の教員へのインタビュー調査より、自然なかかわりや楽しく活動ができたとの回答があった反面、交流相手校の児童が考えてくれたゲームを実施した際、特別支援学校の児童が分かりやすいような支援や配慮があればさらによかったという内容である。そこで、交流する小学校の児童への事前指導の課題がみえてくる。事前学習において、児童が障害のある人に対して、肯定的なかかわり合いができるように児童の意識の転換をしなければ、実際の交流場面では児童がネガティブなイメージのまま障害のある児童とかわかってしまい、豊かな関係形成を築けない可能性が考えられる（高野・片岡 2014）。したがって交流場面において、特別支援学校の児童に必要な配慮について交流相手校の児童が気づけるよう、充実した教員同士の連携と交流相手校の児童への事前学習の重要性が考えられる。

それから教員の臨機応変な対応も大切である。10月30日の学校間交流で実施された〇×クイズでは、特別支援学校の教員がホワイトボードを用意したり、色の問題では色ペンを提示したりするなど児童に問題内容が伝わるような工夫を行っていた。また教員の動きを見て、小学校の児童が「黄色ってこの色だよ」と自分の帽子の色を見せながら B 特別支援学校の児童を誘導していたことがあった。具体物の提示等の伝え方、障害のある児童とのかかわり方を通常の小学校の児童が学べることも交流及び共同学習の意義である。小学校の児童が、どうすれば特別支援学校の児童にも分かりやすく伝えることができるかということを考える経験を積むためにも、当日の活動の場において、特別支援学校の児童とのかかわり方のヒントを出すなど教員からの指導・支援が重要であると考えられる。

2つ目の課題は、交流相手校と特別支援学校との児童数の違いである。交流先の小学校の人数が多いため、特別支援学校の児童らと交流できる人数が限られていることが課題として挙げられた。お互いを十分に知りあうために、児童のグループを調整して児童のかかわりを充実することの必要がある。また特別支援学校の児童の得意な活動を取り入れることで、小学校の児童が特別支援学校の児童の新しい一面に気づき、交流のさらなる深まりを期待できる。

## (2) 居住地校交流に関する課題

久保山らの研究（2006）によると、特別支援学校小学部居住地校交流の課題として「付き添い（送迎も含む）の問題」とともに「学校に残る児童生徒の対応について」について多くの声が挙げられたことを指摘している。本研究では同様に、居住地校交流に参加する児童の引率として1名の教員が学校を離れることにより、学年内の指導体制を組み直す必要のあることが課題として挙げられた。そこで引率する教員が抜けた際、学校に残る教員への支援や協力体制の構築が重要であるといえる。

同行した9月25日、10月30日の居住地校交流の観察では、B 特別支援学校の児童に対して、一部の児童は、話したい気持ちはあるようだが、自分から積極的に話かけることができていないような様子がみられた。当日引率した教員からも、小学校の一部の児童が B 特別支援学校の児童に対して自分からかかわることが少なかった点が課題として挙げられた。特別支援学校の児童の受け止め方に児童によって差が生じることは当然である。しかし、小学校の児童が、特別支援学校の児童へのかかわり方を知らない、分からないという原因も考えられる。そのため特別支援学校の児童へのアプローチの方法や、「こんなときに困ってしまう」あるいは「こんな雰囲気だと楽しく活動できる」等、交流に参加する特別支援学校の児童の特性を事前指導において小学校の児

童にレクチャーすることで当日の交流が深まるのではないかと推察される。加えて B 特別支援学校の教員へのインタビュー調査によると、当日の活動中は、小学校の児童に特別支援学校の児童とどのようにかかわるのかということとその場で説明したとの回答を得た。そのため当日の活動における、特別支援学校の児童と小学校の児童の橋渡しとなるような教員の支援も重要である。

10月23日の居住地校交流では、参加した児童が小学校の児童と仲良く活動に参加している様子であった。活動のときは小学校の児童が B 特別支援学校の児童の近くでダンスの見本を見せたり、ペアになって楽しくゲームしたりする姿がみられた。一方で、引率した教員からは、学年が上がるにつれて、B 特別支援学校の児童と通常的小学校児童の実態差が出てきて、一緒に行う活動内容が難しく特別支援学校の児童が“お客さん”のようになってしまう点が課題として挙げられた。このことから、小学校の児童と一緒に交流の内容設定の難しさが伺える。双方の児童が主体的に参加できる交流活動を設定するために特別支援学校からの情報発信の充実が大切であると考えられる。

## 6 インクルーシブな社会の実現に向けて

本研究を通じて、小学校の児童が特別支援学校の児童との交流に前向きな意識をもっていることが分かった。授業以外の休み時間においても、児童同士が好きな話題で盛り上がる姿、自然に交流する姿をみることができた。このため児童が社会人になったとき、障害のある人を受け止め、障害の有無に関係なく共に活動できることを期待したい。特別支援学校の児童にとっても、交流を通じて、同じ学区の子と一緒にゲームができた、楽しかった、上手に発表ができたなどの体験は、学区の児童と仲良くなれたという成果のみならず、学校卒業後の社会参加への積極的な姿勢へと繋がっていくことが考えられる。このように、交流及び共同学習を捉えると、インクルーシブ教育が導入されることによって交流の機会が増加するとともに、児童同士の自然なかかわりが生まれ、小学校児童にとって障害のある人に対する捉え方の前向きな変化や、特別支援学校の児童にとっても社会参加への積極性の育成という成果が考えられる。また、交流の機会が増加することで、特別支援教育が目指す共生社会の実現を進めるという重要な意義もあるといわれている(杉本 2014)。

本研究では通常的小学校児童の学校間交流に対する前向きな意識を明らかにすることができた一方で、児童がなぜポジティブな意識をもつに至ったか、交流及び共同学習に何を求めているか、他の学年の児童ではどのような意識をもっているか、児童にとって障害理解を効果的に進めていく指導方法の模索についてはさらなる研究が必要である。同様に、特別支援学校の児童生徒にとっての交流の意味をさらにつきとめていくために、小学部段階から学校卒業後に至るまで、交流での体験がどのように反映され、児童の将来にどのような影響を与えているか明らかにしていくことが今後重要となる。インクルーシブ教育を進展させていく上で、交流及び共同学習を活用して児童同士が可能な限り一緒に学んでいくことはその中核を担っているといえる。この研究をここで終わらせることなく、教員として勤務する中でさらに交流及び共同学習について学びを深めていきたい。さらに、本研究から教員同士の連携と事前指導の大切さ、居住地校交流の際の教員の協力体制の構築、特別支援学校からの情報発信についての重要性が確認できた。インクルーシブ教育の実現に向けて、これまでの積み上げてきた成果と交流及び共同学習の意義を再確認するとともに、明らかとなった課題を少しずつ解決していきたい。